

心のケアはメニューに載っていない話

私たちの緩和ケア科では週二回、外来をやっています。当院の内科・外科等でがん治療中の患者さんが主体ですが、他の病院からは緩和ケア病棟について説明してほしいという紹介状を持った方が訪れます。そんな中で時折「ここに来れば心のケアもしてもらえますよね・・・」とお尋ねになる方がいらっしゃる。こんな時私はいささか答えに窮してしまいます。「心のケアって何だ？」と。

さて「心のケア」という言葉には独特な響きがあり、そこから広がるイメージは優しくて夢に満ちています。例えば、闘病にまつわる他人に言えない悩みを抱えた患者さんが、あるお医者さんや看護師さんのさりげないひと言に癒されてしまう、といったところでしょうか。あるいは心の診療科であるとされる精神科医からのアドバイスや薬、臨床心理士の働きでうつ状態が改善することなののでしょうか。じつのところ、後者のほうであれば対応可能です。治療で解決できる部分ですから。

ところが前者のようなあいまいな癒しを求められてしまうと、正直「お約束はしかねます」と言いたくなってしまいます。例えばどうでしょう。私が「うちではこのたび心のケア、始めました」としましょう。で、なにやらありがたいような講釈を垂れて「はい、今のが心のケアでした。じゃあ、あとは会計用紙を持ってお会計ね。」これでやっていける医者もいるとは思いますが、私は無理。むしろそんなことで「うわー心癒されたー！」と思う患者さんがいたら、かえって心配になってしまいます。実際の場面では、それとは反対に、病や困難を抱えた患者さんやご家族に対して、厳しい現実と向き合っていくためのお手伝いをするご方がずっと多いのです。

心のケアというのはたぶん、何かに行き詰まりを感じているひとの心の中で、他人の言葉や歌をきっかけにして、たまたま咲いた花のようなものではないかと私は思います。たまたま咲くはずのその花を狙ってうまいことを言い、結果の約束までするなどということが、できるはずもありません。誤解の無いように申し添えますと、私たちのスタッフは、出会った人たちみんなに少しでも小さな花を持ち帰っていただけるよう心がけていますし、そのための努力は惜しみません。ですが、「心のケア」という名の軟膏も飲み薬もありません。そういうものだと思います。だから、当店のメニューには載っていないのです。